

[第6回日本言語文化学会発表要旨]

台湾の東呉大学などにおける研修の報告

林 嘉恵・押尾 和美・高橋 紀子
(1993.6.19 発表)

0. はじめに

1993年3月15日より約三週間にわたって、お茶の水女子大学日本語文化専攻2年、林・押尾・高橋の3名が東呉大学・国立台湾大学・国立政治大学（以上台北）・東海大学（台中）にて日本語教育研修を行った。研修内容は主として授業見学であったが、諸先生方のご厚意により、教壇実習（国立台湾大学3時間・国立政治大学2時間・東海大学5時間）、自由会話（東呉大学1時間 国立台湾大学2時間・東海大学15分）を行うことができた。

以下は、第6回日本言語文化学会において、各自が分担した発表内容をまとめたものである。

1. 学習環境

台湾の町をあるいていると、至るところで日本の文化を目にすることができる。書店には日本の雑誌が並び、テレビをつければ日本の番組を見ることができ、人々はK T Vとよばれるカラオケボックスで日本語の歌を熱唱している。今日のように町中で日本語を目にすることができるようになったのは、日本が経済大国として世界の注目を浴びるようになってからのことである。

日本文化の流入・日本語の必要性の増加にともなって、大学の日本語学科の人気も徐々に上がり始め、志望する学生の数も増えてきている。台湾における日本語教育は、教師の質・人数ともに十分であること・地理的に日本に近く、日本文化が身近であること・母語が中国語であるため、漢字に対する抵抗感がないことなどを考慮するとかなり恵まれているといえるが、大学教育では概して話すことよりもむしろ日本に関する知識や読み書きを重視する傾向が強いようである。

2. 台湾における日本語教育の流れ

台湾は1886年より約50年に渡って日本の統治下にあり、国語としての日本語教育が行われていた。しかし、1945年、日本の敗戦によって台湾が中国に返還されると同時に、日本語は使用が禁止された。台湾における「外国語としての日本語教育」は、それから18年たった1963年、中国文化学院（現在の中国文化大学）日本語学科の設立に始まる。以後3年ごとに淡江大学・輔仁大学・東呉大学にも日本語学科が設置されることとなった。1972年、台日間の国交が断たれると、しばらく日本語学科の設立は

なかったが、日本の経済大国化とともに日本語の必要性が高まり、新たに1986年には国立政治大学に、1992年には東海大学に日本語学科が設立された。さらに1994年には国立台湾大学にも日本語学科が設立される予定である。また、第2外国語として日本語を学ぼうとする学生も増加しており、今日では英語と並ぶ人気を集めている。

3. 各大学における研修内容

3-1 国立政治大学

国立政治大学日本語学科は1989年に設置され、現在、各学年30名、合計120名の学生が日本語を学んでいる。国家の必要に応じた語学方面の人材を積極的に養成することを学習目標としており、語学学習を主、文化理解を従とした約40科目の授業が設けられている。日本語・日本事情に関する図書もよく整備されており、AV設備や教材も積極的に導入、利用されている。私たち3名は、林 綺雲先生のご厚意により、1年生の〈日本語会話〉、3年生の〈日本名著選読〉の時間に参加させていただいた。

1年生は林先生自身のご執筆による『日語会話突破』を教科書として用い、普段の授業は直接法、対訳法を組み合わせで行っているそうである。日本語の歌を歌ったり、授業開始前にはNHK衛星放送を自発的に見たりと、普段から積極的に日本の文化を取り入れている。まだ半年という学習期間にもかかわらず、学生達は積極的に日本語を使って会話をしようと努めており、約30分という自由会話の時間はあっという間に過ぎてしまった。

3年生のクラスは、本来ならば『城の崎にて』のような日本の文学作品を読む時間であったのだが、わざわざ私たちのために予定を変更してくださった。3年生にもなると、私たちの発話をほとんど理解でき、日本に対する知識も深く、自己紹介も流暢であった。しかし、積極的な発話量・質問の数を比較してみると、かえって学習歴の浅い1年生の方が3年生よりも多いという興味深い実態が見てとれた。これは、上級になるほど間違えてはいけない、間違えたら恥ずかしいという気持ちが強くなるということが原因だと思われる。

国立政治大学での研修はわずか1日であったが、大変密度の濃いものであった。自由会話の時間も大変楽しかったが、特に、3年生のクラスでは先生が席を外され、授業時間すべてを私たちの実習に当ててくださったこともあり、学習者の発話をいかに引き出し、30名という大人数をまとめるかといったクラスコントロールの難しさも考えさせられ、勉強になった。

(押尾)

3-2 国立台湾大学

台湾大学は、第二外国語として日本語の授業を履修する学生が、毎年1500人から多い年には2000人以上おり、日本語教育が盛んな大学の一つである。1994年9月には、日本語学科が新設されることも正式に決定している。日本語を学習した学生の多くが政府機関や金融機関などへの就職を希望しており、そのため話しことばよりは日本語で書かれた文献を読むための読解能力の育成に重点が置かれている。使用教科書は、『初級日本語（漢字版）』（東京外国語大学付属日本語学校編）、『日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ』（日本海外技術者研修協会編）『中級日語総合読本』（水谷信子著）などである。教授法は文法訳読法が主で80人ぐらいの大教室でマイクを使った授業なども行なわれていた。文法説明は非常によく整理されていて、短時間に多くの日本語の知識が得られるための配慮がなされていた。こうした、多人数の学生を相手にした効率的な授業が、台湾大学の日本語授業の一つの特色と言えるだろう。

研修の内容は、1時間の教壇実習と3時間の見学、2時間の自由会話であった。教壇実習では直接法で授業を行なった。普段文法訳読法の授業になじんでいる学習者に、はじめての直接法の授業がいきなり受け入れられるものかどうかやや心配もあったが、反応は思ったよりずっとよく、母国語に頼らず教師のスキットから言葉の意味を類推するという過程を、学習者なりに楽しんでいただろう。しかし、普段の授業にあるような、助詞の用法など細かな文法的説明を要求する学習者が多かったため、次の授業の初めに先生が中国語で補足説明をされていた。授業時間数との関係やクラスの規模から考えても、台湾大学の普段の授業に直接法を取入れるのは、現段階ではやや難しいように思われた。自由会話では、普段の授業が読解重視で会話練習が不足しているためか、会話がなかなかスムーズに進まず、教科書に載っていると通りの文型や語彙しか使えない学生や、ほかの人への質問は聞き取れるのに自分が質問されると緊張して全く何も聞き取れないという学生が目立ち、ほかの能力と比べ、コミュニケーション能力がやや劣っているようだという印象を受けた。しかし、一部の熱心な学生のなかには、非常に優れた会話能力を持っている人もいて、日本語のスピーチコンテストに出場する、という学生の原稿の添削や発音指導もした。日本語学科の新設による、クラス編成の改善と、授業内容の更なる充実、展開が期待される。

3-3 東海大学

東海大学の日本語授業は、1978年に第二外国語科目として開設され、1993年には日本語学科も新設され、現在は日本語学科と第二外国語の二つに別れて日本語授業が行なわれている。日本語学科は開設されて間がなく、研修生を受け入れる準備がないということで、今回私たちは主に第二外国語の方で研修をさせて頂いた。以下の情報も、主に第二外国語としての日本語教育に関するものである。

東海大学の日本語教師は、専任 7名、非常勤15名で、学習者は全学年合わせて1300名前後である。主な学習目標は、①基礎的な会話力の養成②基本文型全般の理解、③日本語文献の読解と日本文化の理解、の三つで、学生の専攻を問わない総合的な日本語能力の育成を目指している。使用教科書は、『新日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ』（日本技術者研修協会編）などで、主な教授法は、文法訳読法、直接法である。

研修の内容は、5時間の教壇実習と4時間の授業見学で、その他、日本語学科の学生と15分間の自由会話を行なった。その内容をいくつか紹介すると、まず教壇実習は、聴解試験と読解、文型の導入などをした。文型の導入は直接法を用いて行なったが、助詞や微妙なニュアンスを持つ言葉の説明には、私たちの経験が浅いこともあって直接法だけではやはり限界があり、直接法の授業を行なうにもある程度学習者の母語の知識が必要だということを感じた。このことは、日本語で質問できない学生の質問も受けられるということや、学習者にとって難しいこと、簡単なことをある程度把握できるということなどからも是非必要なことだろう。また授業見学では、台湾人の先生と日本人の先生が、同じ日に同じ教科書の同じ課の導入をされたのを見学した。まず台湾人の先生の方は、直接法による授業で、授業中中国語はほとんど使われなかった。雑誌やカタログなどから集めた豊富な写真や絵カードを用い、学生に身近な事柄をふんだんにおりませ、朝一番にもかかわらず学生たちの声も大きかった。日本人の先生の方は、文法訳読法による授業で、中国語による体系的な文法、語彙説明が中心だった。母国語を使える気安さからか学生からの質問はかなり活発に出ていたが、その分、授業中日本語で発話する量はやや少なめだったようだ。このように、台湾人の先生が日本語で授業を行ない、日本人の先生が中国語で授業を行なうのを同じ日に見学したことは、授業における学習者母語の使用の問題を考える上で、非常に興味深かった。

(高橋)

3-4 東呉大学

東呉大学の日本語教育は21年の歴史を持ち、台湾の日本語教育に於いては権威のある存在で、授業の種類、内容、教授陣、教材、教具など、あらゆる面において充実した学習環境を提供している。日本語学科の学生は一学年約120人で、特に読解能力がすぐれているそうである。

この大学での研修の内容は、9時間の見学と1時間の自由会話、及び20分の予備調査のデータ収集であった。その内訳は以下の通りである。

①二年生の「中級日語」は、『日本語表現文型』や朝日新聞の天声人語を用いた読解練習の授業であった。「天声人語」は1週間前のもので、かなり新しい教材を使っていることがわかった。みずから進んで積極的に発言する学生も少なくなかった。②二年生の「日語会話」はビデオ教材『ヤンさんと日本の人々』を用いて、聴解の練習や日本文化の紹介をしたりしていた。その後、私達実習生はゲストとして、学生と日本語で自由会話を交わした。学生たちは私達の日本語を全部はわからなかったようだが、一生懸命聞き取ろうとしている姿が印象に残った。③一年生の「日語発音」の担当の先生は台湾人教師だが、日本語の発音はまったく問題がなくまるで日本人のようだった。授業は主にアクセント規則を系統的に導入するといった内容で、特に印象に残ったのは、「平板型動詞のイメージと起伏型動詞のイメージ」のところである。下への移動に関する動詞は起伏型が多く、上への移動に関する動詞や回転・円形・屈曲に関する動詞は平板型が多いというふうに分類されていたのが興味深かった。④三年生の「日語練習」はL1教室で行なわれた。使われていた教科書は『総合日本語 初級から中級へ』（水谷信子著）である。担当の先生によると、テープに学生の声吹き込ませ、それをもとに教師が指導する、といったこともなされているそうである。この授業の後半は私達のデータ収集として使わせて頂いた。学生達に、作文を書いたり文を読んだりしてもらい、私達の資料とさせて頂いた。時間は約20分ぐらいだった。⑤三年生の「日文習作」は先生が学生の作文の中の漢字、語彙、表現などの間違ったところを黒板に書き出し、学生とともに修正、解説するという授業であった。こういった授業は、日本語も中国語も堪能で、微妙なニュアンスまで理解できていないとできないものだと思った。以上の授業はすべて中国語を媒介語としており、日本人教師でも日本語より中国語のほうを授業で多く使う傾向があるようだ。

以上が今回の台湾における研修の概要である。

4. おわりに

この度の研修は非常に多くの方々のお世話になって実現したものであった。まず、私たちの勝手なお願いを快く受け入れて下さった台湾の先生方、特に東呉大学の陳淑娟先生、政治大学の林綺雲先生、台湾大学の趙姫玉先生、東海大学の李恵美先生にはひとかたならぬお世話になった。いきなり日本から来た実習生を授業のカリキュラムに組み入れるという大変な御面倒をおかけしたにもかかわらず、研修の意義をよく理解して下さり、あらゆる面で暖かいお力添えを下さった。更に、帰国後にお願ひしたアンケートにもご協力下さり、この度の研修をいろいろな面で評価して下さった。また、研修校への依頼や連絡などに際しては、横浜国立大学の四方田千恵先生に大変なお骨折りを頂いた。渡台前に先生から頂いたアドバイスは、色々な面で非常に有益であった。さらに、学生さんたちにも本当にいろいろとお世話になった。そのひたむきな学習態度や、不案内な私たちのためにいろいろと心を尽くしてくれた優しさにどれだけ励まされ、力付けられたかわからない。ほかにも今回お世話になった方は数え上げればきりが無いが、この度の研修の成果はそうした方々のお骨折りの賜物である。

このような研修を通して、日本の日本語教育と台湾の日本語教育が互いに刺激し合い、高め合うことができれば、大変素晴らしいことだ。そうした意味で、この度の研修の成果をこれからの研究に最大限に活かすべく努力を重ねていくことが、今回お世話になった多くの方々へのせめてもの御恩返しとなると思う。最後になったが研修全般にわたりご面倒、ご心配をおかけした私たちを最後まで暖かく導いて下さった指導教官の水谷先生、長友先生に、心からお礼を申し上げます。

(林)

<参考文献>

- 江副隆秀・林伸一 (1986) 『外国で日本語を教える』 創拓社
木村宗男 (1986) 「山口喜一郎—人物日本語教育史」 『日本語教育60号』
国府種武 (1931) 『台湾における国語教育の展開』 冬至書房
近藤純子 (1986) 「芝山巖事件」 『日本語教育60号』
蔡茂豊 (1985) 「台湾における日本語教育」 『日本語学 7月号』 明治書院
詹椒琦 (1991) 「植民地統治下台湾の教育政策」 『東京外国語大学日本語学報13』
戸田昌幸 (1980) 「台湾の日本語教育事情」 『日本語教育41号』
渡辺正文 (1969) 「外地における日本語教授法の変遷」 『日本語教育13号』

(お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士2年)